

「日本遺産」登録目指す

県教委と8市町村 2月申請向け準備

長野、山梨両県にまたがる八ヶ岳周辺にある縄文遺産群の「日本遺産」登録に向けて、長野県教育委員会が諏訪地域を含む県内8市町村と申請準備を進めていることが6日、県教委などへの取材で分かった。「山の縄文」をキーワードに八ヶ岳山麓で花開いた縄文文化のストーリーをつくり、地域活性化の取り組みも盛り込んで、来年2月の申請を目指す。認定されると、県内では今年4月の「木曽路はすべて山の中」を守り山に生きる「木曽6町村と塩尻市」以来となる。

(唐沢宏)



日本遺産認定を目指す縄文遺産群がある八ヶ岳山麓

県教委文化財・生涯学習課によると、縄文文化の発信に向けて県教委が10月以降、諏訪6市町村と小県郡長和町、南佐久郡川上村に参加を呼び掛けたという。調整役の県立歴史館（千曲市）は取材に対し、八ヶ岳・霧ヶ峰周辺にある黒曜石の原産地、国宝土偶、へびや顔面を造形した土器などを挙げて、独自に発達した「山の縄文」を特色として打ち出す意向を示した。申請に向けては、複数の市町村にまたがってストーリーが展開する「シリアル（ネットワーク）型」を想定。歴史

日本遺産

文化庁が2015年度から始めた認定制度。保護や保全を促す世界遺産登録や文化財指定とは異なり、国内外に発信して地域活性化を図るのが目的。認定されると国の補助が受けられる。現在の認定遺産は37件。縄文関係では新潟県十日町市などの「信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化」が認定されている。今年度は申請67件のうち19件が認定された。文化庁は訪日外国人旅行者の受け皿となるよう、東京五輪がある2020年までに100件程度の日本遺産認定を目指している。

的な経緯を踏まえ、地域や文化財への興味・関心をかきたてる「ストーリー」にまとめる。情報発信や人材育成、普及啓発、調査研究、環境整備

など地域活性化に向けた具体的な取り組みも提示する。県教委と8市町村は今後、広域的な連携の拡大も視野に入れて、来年2月に申請書を出し、来年2月に申請書を出すと、日本遺産審査委員会が「地域の歴史的特徴・特色や我が国の魅力を十分に伝えるストーリー」になっているか

審査し、来年4月末ごろに結果を発表する予定という。国宝土偶2体を保有する茅野市の柳平千代一市長は「縄文文化を発信するわれわれの取り組みに、いよいよ県教委が一步踏み込んでくれた。各市町村が縄文で連携を図っていく上で非常にありがたい」と話している。